— 発 行 —

伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス
〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2 京都芸術センター内

TEL 075-255-9600
FAX 075-213-1004
e-mail taro@kac.or.jp
URL http://www.traditional-arts.org

— 発 行 日 —

平成 31 年 3 月 31 日

伝統芸能文化創生プロジェクト
2018年度 事業報告書

伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス（TARO）

Traditional Arts Archive & Research Office

伝統芸能文化を未来へ

Traditional Arts
Archive
&
Research
Office

伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス（TARO）

目 次

1. 伝統芸能文化創生プロジェクトについて ―― p.1

2. 伝統芸能文化とは ―― p.2

3. 実施事業

実施事業一覧 ―― p.3

a. ネットワーク ―― p.4
― ネットワーク構築
― 伝統芸能文化創生ネットワーク会議：「無形文化遺産の防災」関西連絡会議

b. 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化 ―― p.5~7
― 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム

c. 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム＆公演 ―― p.8~11
― 変わりゆく伝統芸能

d. 市民向け講座 ―― p.12~13
― 講座シリーズ
#4 篠笛を知る～祭が育む日本の音～
#5 三味線組歌ってなに？ ～楽譜から読み解く三味線古歌謡～

e. リサーチ＆インタビュー ―― p.14
― 先覚に聴く

f. 地域の小学校との連携プログラム ―― p.15
― 雅フェスティバル

g. 相談窓口 ―― p.16~17

h. 受託・協力事業 ―― p.18~19
― 教文伝統芸能シリーズ「能楽なう」ほか

i. ウェブサイト ―― p.20

4. 伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議委員より ―― p.21~23

1 伝統芸能文化創生プロジェクトについて

■「伝統芸能文化創生プロジェクト」と「伝統芸能文化センター」構想

「伝統芸能文化センター」は、2011年に京都市が策定した「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）基本構想」（素案）に示されている“伝統芸能文化の継承・創造の拠点施設”です。センターが備えるべき機能として以下の６つが掲げられています。

1 伝統芸能に関する学術研究
2 伝統芸能に関する創造・普及
3 楽器・用具用品に関する相談・支援
4 ネットワーク・コーディネート
5 全国発信・地域間交流
6 海外発信・国際交流

この６つの機能の実現のため、先行的に実施した 2007～2013 年度の「京都創生座」や 2009～2016 年度の「五感で感じる和の文化事業」では、流派を越えて伝統芸能の持つ力を引き出す創作・公演や、国内外への発信・交流、一般市民への普及等に取り組んできました。その成果を引き継ぎ、2017 年度からは「伝統芸能文化創生プロジェクト」として、上記の６つの機能を更に強化するための活動を行っています。この「伝統芸能文化創生プロジェクト」を推進する主体となるのが、京都市と京都芸術センターから成る伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス（TARO）です。

■ 伝統芸能アーカイブ ＆ リサーチオフィス
（Traditional Arts Archive&Research Office 略称:TARO）

TARO は、「伝統芸能文化センター」に必要とされる機能の確保・強化に取り組む事務局として 2017 年に京都芸術センター内に設置されました。伝統芸能の継承や保存、用具・用品とその材料の確保、普及・創造・発信活動など、伝統芸能文化の総合的な活性化の観点から、ネットワークの構築や基礎調査等を進めています。

■「伝統芸能文化センター」構想の経緯

2003 年度	京都創生懇談会より「国家戦略としての京都創生の提言」提出
2004 年度	「歴史都市・京都創生策」策定
2006 年度	京都創生研究会「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）」分科会を設置。2008 年度まで検討（全 9 回開催） 「歴史都市・京都創生策 II」策定→国へ要望 「京都文化芸術都市創生計画」策定→「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）の整備」が重点課題に
2007 年度	「京都創生座」事業の実施（～2013 年度）
2009 年度	「五感で感じる和の文化事業」の実施（～2016 年度）
2011 年度	「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）基本構想（素案）」策定→国へ要望（以降，毎年度要望） 「京都文化芸術都市創生計画　改訂版」策定→重要施策群 1 ：継承と創造に関する人材の育成等に位置付け
2013 年度	「創生劇場」の実施（～現在）
2014 年度	「京都文化芸術プログラム 2020」策定→プログラムを牽引する重要事業に位置付け
2016 年度	「第 2 期 京都文化芸術都市創生計画」策定→8 つの最重要施策のうちの 1 つに位置付け
2017 年度	「伝統芸能文化創生プロジェクト」の実施 「伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス」を京都芸術センター内に設置

② 伝統芸能文化とは

TARO が対象とする伝統芸能文化は、**古典芸能**（落語、漫談、義太夫、奇術などの演芸も含む）や**民俗芸能**（広義の儀礼・祭礼・年中行事等を含む）、これらに不可欠な材料・道具の製作に係る**伝統工芸技術**に至るまで、極めて多岐にわたります。

伝統芸能文化創生プロジェクトでは、以上のように「伝統芸能」に係る多くの分野を総合した概念として「伝統芸能文化」という名称を用いています。

歴史を通じて形成されてきた精神性、美的感性、文化的価値が総合的に凝縮されている伝統芸能文化は、言語や文学の伝統と同様に失ってはならないかけがえのないものです。

	古典芸能	民俗芸能
伝承者と鑑賞者	専門の実演家によって、目の肥えた観客を相手に演じられてきた。	芸能専業ではない伝承者によって、信仰行事の一環として、神仏に奉納するために演じられてきた。
内容	日本で近世以前に創始され、現在も実演されている芸能。能・狂言・歌舞伎・文楽・日本舞踊・邦楽・落語・講談など。	五穀豊穣・長寿・悪疫退散などを神に祈って行われる民間の信仰行事に伴い、各地域社会で伝承されてきた芸能。郷土芸能。

上記に係る伝統工芸技術や楽器・用具用品、材料等

古典芸能、民俗芸能に用いられる楽器・用具用品、またそれらを作るために必要な材料や伝統工芸技術。

③ 実施事業

■ 実施事業一覧

a ネットワーク

— ネットワーク構築
— 伝統芸能文化創生ネットワーク会議：「無形文化遺産の防災」関西連絡会議

b 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化

— 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム

c 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム＆公演

— 変わりゆく伝統芸能

d 市民向け講座

— **講座シリーズ**　#4 篠笛を知る～祭が育む日本の音～
#5 三味線組歌ってなに？ ～楽譜から読み解く三味線古歌謡～

e リサーチ＆インタビュー

— 先覚に聴く

f 地域の小学校との連携プログラム

— 雅フェスティバル

g 相談窓口

h 受託・協力事業

— **受託事業**　教文伝統芸能シリーズ「能楽なう」
— **協力事業**　シンポジウム「京都創生推進フォーラム」
京都市自治 120 周年記念式典　オープニングセレモニー
平成 30 年度京都市平和祈念事業

i ウェブサイト

a ネットワーク

― ネットワーク構築

TARO は、伝統芸能文化の保存・継承・普及・アーカイブ等に取り組む
下記の機関・施設等とネットワークを作り、情報共有と連携を図っています。

- 一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会
- 今井三絃店
- 株式会社篠笛文化研究社
- 株式会社鳥羽屋
- 株式会社宮本卯之助商店
- 上鳥羽橋上鉦講中
- 木之本町邦楽器原糸製造保存会
- 岐阜県産業技術センター 紙業部
- 京都市産業観光局商工部伝統産業課
- 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
- 京都市歴史資料館
- 京都伝統産業ふれあい館（公益財団法人京都伝統産業交流センター）
- 公益財団法人鼓童文化財団
- 公益財団法人札幌市芸術文化財団
- 公益財団法人日本伝統文化振興財団
- 公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団
- 公立大学法人京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
- 国際日本文化研究センター（日文研）
- 国立能楽堂（独立行政法人日本芸術文化振興会）
- ゴッタン成音会
- 茂山千五郎家
- 曽於市立財部北小学校
- 地方独立行政法人京都市産業技術研究所
- 伝統芸能の道具ラボ
- 東京鹿踊
- 独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター
- 独立行政法人国立文化財機構東京文化財 研究所無形文化遺産部
- 福居一大会甑島ごったん部
- 福知山伝統文化を守る会（NPO 法人丹波漆）
- 福知山藍同好会（由良川藍）
- 丹後二俣紙保存会（丹後和紙）
- フリースタイルな僧侶たち
- 文化庁地域文化創生本部
- 文化庁文化財第一課
- 邦楽ジャーナル
- よせぴっ

ほか　（５０音順）

― 伝統芸能文化創生ネットワーク会議：「無形文化遺産の防災」関西連絡会議

日時 | 2019 年 2 月 3 日（日）10:30-13:30
会場 | 京都芸術センター ミーティングルーム２

東京文化財研究所 無形文化遺産部が行っている、関西の各府県の文化財担当者を対象にした「無形文化遺産の防災」関西連絡会議との共催で、伝統芸能文化創生ネットワーク会議を開催しました。

この会議は、国立文化財機構が平成 26 年 7 月より文化庁の補助金事業として取り組んでいる「文化財防災ネットワーク推進事業」の一環で、無形文化遺産の防災について検討・推進するため、防災の基礎情報となる文化財の所在情報の収集・共有や、関係者間のネットワーク構築を目指して行われています。

初の京都での開催となった今回は、近畿圏の文化財担当者 8 名、文化庁、東京文化財研究所から 5 名、京都市から 4 名、計 17 名が参加しました。参加者それぞれの地域に残る無形文化財に関する実情や、保存・防災に関する取組について情報交換を行い、課題を共有するとともに、相互にネットワークを構築しました。

b 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化

― 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム

伝統芸能文化において支援を必要とするプログラムを公募し、内容を審査したうえで、伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィスとの共同プログラムとして実施しました。

「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」は助成金ではありません。提出された申請書を基に計画から運営まで申請者と TARO が共同で行うという全国でも他に類を見ないものです。申請者（団体）と TARO のいずれか一方だけでは実現できないような取り組みを共同で実施することで、伝統芸能文化に新しい波を起こすことを目指しました。今年度は 20 件の応募があり、審査の結果、次ページの 3 件を採択しました。いずれも 2 箇年の計画であり、現在も進行中です。

1．目的・特徴

伝統芸能に用いられる楽器・用具用品の復元や、伝統芸能文化を現代に適合した形で活性化させようとする取組を、伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィスと共同で実施しました。

2．募集する事業

ア　伝統芸能文化の保存、継承、普及、活用のために必要な取組
イ　継承に関して緊急性・必要性が高く、関係機関の協力が必要な取組

3．対象者

研究者及びコーディネーター、実演家、職人、地域の文化を保存する方々など

4．伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィスが負担する金額上限

1 件当たり 100万円／年

5．募集期間

2018 年 5 月 10 日（木）～7 月 10 日（火）

3. 実施事業
b. 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化

― 平成 30 年度 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム採択事業

■ 上鳥羽の芸能六斎の復活を目指して－祇園囃子の創作

申請者：上鳥羽橋上鉦講中（代表：熊田茂男）

上鳥羽で大正期以来中断していた「芸能六斎」を復活させようとする取り組みです。伝統的な「念仏六斎」によりエンターテイメント性の高い「芸能六斎」を加えることで、念仏と芸能の双方を有したより古い姿の京都の六斎念仏を復元することを目指しました。上鳥羽では、2011年以降、演じ手に小中学生を加えたり、外部から指導者を招くなどして、六斎念仏の改新に精力的に取り組んできました。この団体は「芸能六斎」に必須の３演目のうち、これまでに「四つ太鼓」と「獅子と土蜘蛛」を再生させてきましたが、今回は「祇園囃子」を復活させます。これらの演目は過去の記録が残っていないので、「復活」より「創作」の性格が強いと言えます。失われた演目の復活を課題としている芸能は多々ありますが、その一つのモデルケースとなることを目標としています。

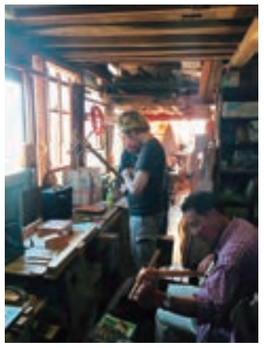
■ 柳川三味線のための胴皮新素材開発

申請者：林美恵子（柳川三味線）

三味線の胴皮に用いられる猫皮の生産は減少傾向にありますが、柳川三味線に特有の薄くてしなやかな子猫の皮は、更に入手が危機的な状況にあります。胴皮を安定して供給するための別路を見出すため、和紙による代替品を開発することがこの事業の目的です。和紙は製法によってはかなりの強度が得られるばかりか、スピーカーの音響板に用いられるなど音響効果にも定評があります。現在、岐阜県産業技術センターの協力のもと、三味線の胴皮に相応しい和紙の製作に取り組んでいます。今回の目標は、京都にしか伝わっていない柳川三味線向けの、実用に耐えうる新素材の開発ですが、それは慢性的な皮不足に直面している全国の三味線にも使えるものに発展していく可能性を秘めています。

■ ゴッタンの製造技法および基礎資料のアーカイブと交流ネットワークの創出

申請者：ゴッタンプロジェクト（代表：橋口晃一、黒坂周吾）



この取組は、京都外から採用したプランです。「ゴッタン」とは、胴の部分が木製の箱になっている三味線で、別名で箱三味線や板三味線とも呼ばれます。鹿児島県と宮崎県の一部では庶民の生活に根ざした楽器としてゴッタンが親しまれていましたが、戦後になると、急速にその姿が見られなくなっていきました。1977 年に国立劇場で弾き語りをした荒武タミさんという不世出の奏者の活躍もあって一部の民俗学者や音楽学者の間では認知されていましたが、ゴッタンとその文化は今では人々の記憶から忘れ去られつつあり、とりわけ製造技術の継承が危ぶまれています。そこで今回は、楽器製作技術の記録作成と、歴史的背景の基礎調査、ネットワークの構築によって認知の向上を目指します。

■ 申請者説明会

東京
日時：2018 年 6 月 10 日（日）15:00 ～ 17:00
会場：独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所

京都
日時：2018 年 6 月 17 日（日）15:00 ～ 17:00
会場：京都芸術センター

「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」募集期間内に、東京と京都の２会場で、本プログラムの趣旨についての説明会を開催しました。応募を検討している方を対象とした個別相談や、申請書の書き方等についてのアドバイスも行いました。

▲東京会場

▲京都会場

■ 中間報告会

日時：2019 年 2 月 2 日（土）18:00～20:00
会場　京都芸術センター フリースペース

今年度の「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」で採択した３つの事業について、開始から４箇月後の時点での活動成果を一般に向けて報告しました。

3. 実施事業
c. 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム＆公演

c 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム＆公演

シンポジウム＆公演

― 変わりゆく伝統芸能

日時 | 2019 年 2 月 3 日 (日) 14:00 -17:00
会場 | 京都芸術センター 講堂

シンポジウム (14:00-15:30)

清水賢二郎（岡山県神社庁所属神楽師、備中神楽北山社、芳友会所属）
十川みつる（讃岐獅子舞保存会会長）
小岩秀太郎（東京鹿踊代表）
原田一樹（京都・祇園祭 綾傘鉾囃子方）
ファシリーテーター：俵木悟（成城大学教授）

公演（15:45-17:00）

備中神楽　芳友会
讃岐獅子舞　中組獅子保存会
鹿踊　東京鹿踊
棒振り囃子　綾傘鉾囃子方
司会：小林昌廣（情報科学芸術大学院大学教授）

来場者数：213 名
助成
文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

伝統芸能を現代に生きたかたちで引き継ぐことはどのようにして可能になるのかという問題意識のもと、「変わりゆく伝統芸能」をテーマとしたシンポジウムと公演を二部構成で開催しました。

第一部のシンポジウムでは、日本各地の伝統芸能を牽引するキーパーソンによる現状報告と、これからの展開を考えるディスカッションを行いました。はじめの現状報告では、それぞれが所属する団体の活動の紹介とともに、個人的な取組についてお話いただきました。

1 人目の清水賢二郎氏は、備中神楽の社中を越えた若手太夫からなる「芳友会（ほうゆうかい）」2 代目会長です。清水氏は、第 10 回社会人落語日本一決定戦で上位 10 人に入るほどの落語愛好者であり、落語と神楽を相互に生かす意識でそれぞれに取組んでいるのだと言います。2 人目の十川みつる氏は、最盛期には 1200、現存するだけでも 800 ほどの獅子舞団体がある香川県の讃岐獅子舞保存会の会長です。2009 年から行われている PR イベント「獅子舞王国さぬき」が始まるきっかけとなったのが京都在住の人の働きかけであることに感謝の意を表明し、場内にいたその方へのサプライズも飛び出しました。3 人目の小岩秀太郎氏は、岩手県の芸能である鹿踊（ししおどり）を東京で演じる「東京鹿踊」の代表者であると同時に、全日本郷土芸能協会の事務局次長・理事でもあります。数多くの民俗芸能に実際に触れ、現状を見てきた人ならではの視点から東北の民俗芸能についてお話いただきました。最後に、京都・祇園祭の綾傘鉾の囃子方である原田一樹氏は、プロの篠笛奏者でもあり、和太鼓集団「祝座」では唄舞や神楽、自身のロックバンドではボーカルを担当するなど多彩な活動を展開しています。それぞれの芸能自体や団体の活動内容もさることながら、個人での活動も非常にユニークであり、興味がかき立てられました。

ディスカッションは、以上のように現場に携わる 4 名がファシリテーターの俵木悟氏からの問いに応じる形で進められました。芸能が必然的に「変わってしまう」場合と、積極的に「変えていく」ことにどのような違いがあるのか、具体的にはどのように伝統「が変わる / を変える」のか、また、文化資源としての活用の是非といった話題が振られ、各者の実践に基づいた活発な議論が行われました。

3. 実施事業
c. 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム＆公演

第二部では、備中神楽、讃岐獅子舞、鹿踊、綾傘鉾の４つの芸能が、それぞれ省略・再構成された形で実演されました。まず、備中神楽の芳友会は、語り芸的性格が強い「松尾明神（まつのおみょうじん）」を実演しました。本来は、酒の神様である松尾明神が出雲からの道中記を語るという内容の演目ですが、今回は、京都までの旅路バージョンにアレンジしていただきました。次に、讃岐獅子舞が披露されました。香川の獅子舞は、張子（はりこ）の頭をかぶり、胴体部分には唐草模様ではなく鮮やかな色彩の柄の布（油単）が用いられ、太鼓と鉦による賑やかなお囃子を伴って舞うという独特のものです。「より優雅に、より勇ましく、より生き物のように」という中組獅子保存会のモットーの通り、ダイナミックで迫力のあるパフォーマンスが行われました。３番手の東京鹿踊は、角のついた「鹿頭（ししがしら）」、極彩色の衣装や、背中に背負った長いササラといった出で立ちが特徴的です。大地を踏みしだきながら太鼓を叩き、上半身と頭を揺さぶる野生的な動作が呪術的な祭祀を思わせます。最後に披露されたのは、綾傘鉾の棒振り囃子です。祇園祭が平安時代の疫病除けに端を発しているように、棒を振るのには厄払いの意味が込められています。「とざーい、東西」という口上に始まり、蜘蛛の糸を投げ、太鼓の踊り打ちが速まっていくにつれて棒振りもブンブン加速していき、最後に颯爽と去っていくという疾走感のある演技でした。

今回のシンポジウム＆公演「変わりゆく伝統芸能」は、日本各地の異なるジャンルの民族芸能の「今」に触れることができる貴重な機会となりました。

d 市民向け講座

講座シリーズ

「講座シリーズ」は、専門家や活動団体、研究機関とのネットワークから
毎回異なる講師をお招きし、独自の切り口で伝統芸能文化を紹介する講座です。

■ #4 篠笛を知る～祭が育む日本の音～

日時	2018 年 11 月 18 日 (日)
会場	京都芸術センター 大広間
お話	13:00～14:30
篠笛体験	14:30～16:00
講師	森田玲（篠笛奏者）、森田香織（笛師）
来場者数	73 名

「篠笛（しのぶえ）」は、日本に古くから伝わる竹の横笛で、太鼓とともに祭の中で育まれてきました。江戸時代には歌舞伎の三味線音楽に採り入れられ、明治以降は演奏会形式の舞台も多く催されています。日本人なら誰もがどこかで耳にしたことがある楽器ですが、その歴史や文化については意外と知られていません。

本講座では、長年にわたって篠笛の演奏・指導・調査研究をされている篠笛奏者の森田玲氏と笛師の森田香織氏をお招きし、第一部では、篠笛の演奏を交えながら、その歴史や文化についてお話しいただきました。そして、第二部では、参加者が実際に篠笛を吹くことによって、その響きを体感できる場を設けました。

■ #5 三味線組歌ってなに？ ～楽譜から読み解く三味線古歌謡～

日時	2018 年 12 月 23 日 (日) 14:00～16:00
会場	京都芸術センター 大広間
講師	井口はる菜（関西外国語大学外国語学部講師）
曲目	「琉球組」「千代の恵」「早舟」「乱後夜」「晴嵐」
演奏	後藤愉香、鈴木由喜子、髙橋要、林美恵子 林美音子、百武史子、吉田則子
来場者数	151 名

「三味線組歌」は、すべての三味線音楽の中で最初に生まれた芸術歌曲です。

京都には、昔ながらの柳川三味線で演奏される柳川流三味線組歌が伝承されており、その古い楽譜も残っています。全部で 34 曲の楽譜がありますが、わずか６曲しか伝承されておらず、地歌箏曲家の故・津田道子師によって復原された数曲を含めても、演奏されていない曲はまだたくさんあります。そうした研究の流れを引き継ごうと、この度、地歌研究の井口はる菜氏によって、「乱後夜」「晴嵐」の２曲が新たに復原されました。

本講座では、井口はる菜氏を講師に招き、古楽譜に書かれている内容や解読方法など、復原のプロセスについてお話しいただくと共に、復原曲を含めた三味線組歌の演奏を披露しました。

e リサーチ＆インタビュー

― 第４回 先覚に聴く｜民俗学者 赤坂憲雄

日時	2019 年 3 月 21 日（木・祝）15:30〜17:00
会場	京都芸術センター フリースペース
話し手	赤坂憲雄（民俗学者）
聞き手	小岩秀太郎（東京鹿踊代表）
来場者数	55 名

「先覚に聴く」は、他に先んじてあることの重要性に気づき、礎を築いた先覚者からお話をうかがうプログラムです。

今回は、東北地方の文化や歴史、風土などを総合的に研究する「東北学」の提唱者として知られる民俗学者・赤坂憲雄氏に、鹿踊をはじめとした東北の民俗芸能についてお話しいただきました。 聞き手には、東京を拠点に活動する「東京鹿踊」の小岩秀太郎氏をお招きし、鹿踊の意義や地域の人のなかでの在り方等について掘り下げるとともに、全国の芸能との関わりについても議論を深めました。

f 地域の小学校との連携プログラム

TARO は、子どもや青少年に向けた伝統芸能文化の普及・教育にも力を入れています。
今年度は、京都市立御所南小学校と連携して、児童が授業で学んだことの成果を発表する場を設けました。

― 雅フェスティバル

日時	2018 年 9 月 5 日 (水) 13:30〜15:00
会場	京都芸術センター 各会場
主催	京都市立御所南小学校６年生 伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス（京都市、京都芸術センター） 京都工芸繊維大学
協力	文化庁地域文化創生本部

京都市立御所南小学校６年生は、総合的な学習の時間「雅のまこと」で、弟子入り体験や授業を通じて、日本舞踊、箏、書道、能、狂言、落語、雅楽、いけばな、水墨画、茶道を学びました。TARO は御所南小学校と共同主催で、児童がそこで学んだことを発表する「雅フェスティバル」を企画しました。

「雅フェスティバル」の実施にあたって、児童の自主性を重視して、TARO はアドバイザーとして関わりました。広報から準備、発表内容の決定まで、出来るだけ児童自身に行なってもらいました。まず、自分たちが感じた伝統芸能、伝統文化の魅力を伝えるために、グループに分かれてディスカッションを行い、体験コーナーや展示、実演といった形態で発表することを決定しました。また、ポスターの作成・配布、マスコットキャラクターのデザイン、当日のフェスティバルの運営等も児童自らが行いました。

併せて、京都工芸繊維大学の夏季集中科目「京の文化行政」としても位置付け，大学生にも、児童の視点から見た伝統芸能・伝統文化を体験してもらい、小学生、大学生、地域住民の交流の輪が広がりました。

g 相談窓口

TARO では、伝統芸能文化に係る相談窓口を設置しています。芸能の演者、彼らを支える人、芸能に関心のある人など、どなたからでも相談を受け付けています。また、それをきっかけに様々な支援活動を展開しています。

質問・相談者

アーティスト	11
実演家（古典芸能）	20
実演家（民俗芸能）	32
職人	4
研究者	11
一般	14
学校	11
企業	11
団体・公共施設	7
市町村（地方自治体）	33
メディア・プレス	18

（件）

連絡方法

電話	75
メール	45
対面	52

（件）

地 域

京都府内	78
京都府外	74
その他	20

（件）

質問・質問内容

TARO の活動について	11
企画・運営に関する相談	30
取材依頼	18
復元・活性化共同プログラムに関する質問	82
民俗芸能	12
古典芸能	11
伝統工芸	4
その他伝統工芸	4

（件）

（2019 年 1 月 30 日現在） **件数 172 件**

質問・相談例

伝統芸能の分野でマネージメントができる制作者を教えてほしい。（演劇制作者）

英語が話せる僧侶を紹介してほしい。（アーティスト）

地域の芸能の保存会を作ったので衣装が大量に必要になった。生地を販売してくれる業者を知りたい。（民俗芸能保存会）

神楽を調査したいので、受け入れてくれる団体に取り次いでほしい。（演劇制作者）

総合的な学習の時間で、歌舞伎について調べている。わかりやすく説明してくれる先生を教えてほしい。（小学生）

総合的な学習の時間で児童が伝統芸能について調べた成果を、一般にも発表したい。どういう発表にしたらいいか相談にのってほしい。（小学校教諭）

TARO 主催のイベントに出演した民俗芸能団体に自分の寺にも来てもらいたい。（寺社関係者）

海外からゲストが来る学会のパーティーで日本の伝統芸能を紹介したいので、相談に乗ってほしい。（コンベンションの企画・運営会社）

?

能楽の観客を増やす方法について相談したい。（実演家）

伝統芸能の体験教室を企画・運営しているが、内容をもう少し変えていきたい。いきなり変えるのは難しいが、どこから工夫していくといいか。（団体職員）

京都の伝統芸能の実演家に依頼をしたいが、どうやってコンタクトを取ればいいのか知りたい。（地方自治体職員）

海外の人たちに日本のきちんとした和の魅力や日本舞踊の魅力を伝えたいのでアドバイスがほしい。（日本舞踊家）

民俗芸能に使われる楽器を自分も演奏したいので入手先を教えてほしい。（ミュージシャン）

島でお盆に舞う芸能をどうやって地域で盛り上げて行ったらいいのか、アイディアがほしい。（民俗芸能関係者）

類似した芸能で西日本のネットワークをつくるのであれば、ぜひ参加したい。（民俗芸能保存会）

ある古典芸能で用いる道具の職人がいなくなってきたので、その道具に係る関係者間ネットワークを作ろうと考えている。相談に乗ってほしい。（舞台道具会社）

修学旅行で京都に来るので、茶道を体験して学べるところを教えてほしい。（中学生）

狂言のある演目の映像を提供してほしいとテレビ局から問い合わせがあったので、許可をとるための事務所に取り次いでほしい。（公共施設職員）

アジアのタップダンスを紹介してほしい。（地方自治体職員）

民俗芸能をアートとして認知してもらう方法について相談したい。（民俗学研究者）

古典芸能祭りを開催したいので、参考になりそうな例を教えてほしい。（地方自治体職員）

初心者が能や狂言を鑑賞して楽しむには、どのあたりに注目すればいいのか。（一般）

!

三味線の貸し出しをしてくれるところがあれば教えてほしい。（小学校教諭）

現代演劇やコンテンポラリーダンス等の身体表現の分野で注目されている作品を教えてほしい。（実演家）

h 受託・協力事業

受託事業

― 教文伝統芸能シリーズ「能楽なう」

日時：2018 年 6 月 12 日（火）18:30 開演
会場：札幌市教育文化会館　大ホール

― 能 宝生流『藤戸（ふじと）』

シテ	小倉健太郎
ワキ	大日方 寛　　ワキツレ｜則久英志
アイ	茂山 茂

後見	當山孝道　和久荘太郎
地謡	金井雄資　東川光夫　小倉伸二郎
	當山淳司　川瀬隆士　田崎 甫
笛	竹市　学
小鼓	成田達志
大鼓	亀井広忠

― 狂言 大蔵流『口真似』

太郎冠者	茂山童司
主人	茂山　茂
客	茂山逸平

― 能 観世流『善界（ぜかい） 白頭（はくとう）』

シテ	林 宗一郎	ツレ	坂口貴信
ワキ	則久英志	ワキツレ	大日方 寛
アイ	茂山逸平		

後見	味方　團　松野浩行
地謡	観世喜正　浦田保親　谷本健吾
	川口晃平　河村和貴　樹下千慧
笛	竹市　学
小鼓	成田達志
大鼓	亀井広忠
太鼓	前川光範

解説	小林昌廣（情報科学芸術大学院大学教授）
主催	札幌市教育文化会館
共催	北海道新聞社
企画制作	伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス
後援	札幌市、札幌市教育委員会

TARO は、主催者である札幌市教育文化会館と連携して、本格的な能舞台を使い、次世代へ向けて能楽を普及する「教文古典芸能シリーズ」を毎年開催しています。今年度からは、「能楽なう」というシリーズで、今最も旬の能楽師を紹介しています。

今回は、関東で活躍する宝生流の小倉健太郎と、京都を代表する観世流の林宗一郎を招き、宝生流『藤戸』、観世流『善界 白頭』を上演しました。二人の能楽に対する考え方は対照的です。小倉は、「宝生流の能は地味だが、流儀で定められた謡や型をしっかり勤めているのだ」と言います。そのため、宝生流のなかでも写実の多い曲「藤戸」を選び、前シテでは子の命を奪われた恨み、悲しみ、怒り、狂気を演じ、後（のち）では殺害場面の描写を静かに演じました。それに対して、林は「五流のなかで常に時代の最先端でありたいと考えているのが観世流だ」と理解しています。そこで、演目に観世流の正式な小書となった「白頭」がつく『善界』を選択し、天狗の滑稽さを重厚かつ豪快に演じました。双方の自らの流派に関する考え方が反映される舞台となりました。また、公演翌日には、札幌市内の小・中学校を対象に、能楽セミナーを実施しました。能の囃子や謡についてレクチャーを行い、教科書でもとりあげられている『羽衣』を舞囃子で披露しました。

3. 実施事業
h. 受託・協力事業

協力事業

― シンポジウム「京都創生推進フォーラム」

オープニングでの「長唄三味線組歌」のコーディネートとして協力。

日時：2018 年 7 月 27 日（金）13:30-16:00
会場：ロームシアター京都サウスホール
出演：杵屋勝七郎、杵屋寿哉
主催：京都創生推進フォーラム、京都市
後援：京都創生百人委員会
協力：伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス

― 京都市自治 120 周年記念式典　オープニングセレモニー

オープニングセレモニーの能楽の企画制作として協力。

日時：2018 年 10 月 15 日（月）10:00-12:00
会場：ロームシアター京都 メインホール
内容：いけばなと小鼓のコラボレーション、金剛流舞囃子『田村』
出演：桑原仙溪
　　金剛龍謹、豊嶋晃嗣、宇髙徳成、山田伊純、惣明貞助
　　杉信太朗、曽和鼓堂、谷口正壽
主催：京都市
協力：伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス、（公財）京都市芸術文化協会

― 平成 30 年度京都市平和祈念事業

日中韓三か国によるステージパフォーマンスの日本・中国コーディネート役として協力。

日時：2018 年 11 月 3 日（土・祝）13:00-15:00
会場：京都市国際交流会館 1F イベントホール
出演：華～puspa～（タップダンス）、姜鵬（中国変面）、大邱市立国楽団
主催：京都市
協力：伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス

i ウェブサイト

— http://www.traditional-arts.org/

今年度、TARO ウェブサイトを開設しました。

TARO の最新ニュースやイベント情報だけではなく、伝統芸能文化に関する記事や、過去事業の記録を動画と文章で随時投稿しています。ウェブ相談窓口では、伝統芸能文化に関する相談、伝統芸能文化復元・活性化共同プログラムやイベントに関するお問い合わせ等を受け付けています。いつでも気軽にアクセスできるウェブサイトが皆さんと繋がる第一歩となります。また、TARO の年度事業報告書や、「伝統芸能文化センター」設立に向けた、京都市と京都芸術センターの取り組みをまとめた冊子「伝統芸能文化センターの実現を目指して」もダウンロードできます。

④ 伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議委員より

TARO は、伝統芸能に関する専門家からの意見を仰ぐ機会として伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議を設置しています。

伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議委員	
	久保田裕道（東京文化財研究所 無形文化遺産部 無形民俗文化財研究室長）
	小林昌廣（情報科学芸術大学院大学 教授）
	竹内有一（京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 教授）
	田口肇（京都市産業技術研究所　産業・文化連携担当課長　研究主幹）
	西岡陽子（大阪芸術大学 教授）
	広瀬依子（追手門学院大学 国際教養学部 講師）
	吉田純子（文化庁 文化財第一課 芸能部門 調査官）
	北村信幸（京都市 文化市民局 文化担当局長）

民俗芸能のネットワークづくり ～TAROに期待すること～

久保田裕道（東京文化財研究所 無形文化遺産部 無形民俗文化財研究室長）

2019 年 2 月 23 日、鳥取県鳥取市で「無形民俗文化財『麒麟（きりん）獅子舞』連合保存会」が創設された。麒麟獅子舞というのは鳥取県東部と兵庫県北西部だけに分布する、獅子舞の形態である。動物園のキリンではなく、キリンビールに描かれているような想像上の獣である「麒麟」の頭を持つ。鳥取県東部には実に 130 に及ぶ麒麟獅子舞が伝承されているのだが、うち 88 団体が今回加入を表明した。

実はこれに先立つこと 2 年前、「因幡麒麟獅子舞の会」という団体も既に起ち上がっていた。県で麒麟獅子舞の総合的な調査をおこなったことを契機として、ネットワークの重要さを考える機運が高まった結果である。ただし、ここに参加しているのは 40 数団体。こちらの会では、イベント的なものへの出演なども考えているため、参加を躊躇してしまう団体も多いのであろう。今回の連合保存会の設立は、それをカバーする意味でも大きな意味を持っている。

こうした同系統の民俗芸能が多数存在しているという状況は、他にも種々ある。例えば、香川県と富山県には、それぞれ 800 を超す獅子舞が伝承されている。しかし、それらをつなげるネットワークは、未だ存在していないのだ。ただ、香川県ではいま獅子舞の伝承者たちが起ち上げた「讃岐獅子舞保存会」が中心となって、獅子舞が集まる「獅子舞王国さぬき」のイベントを開催している。2018 年度には文化庁の文化遺産総合活用推進事業も受けて、活動している。もしかしたら、今後は連絡保存会のようなものができてくるのかもしれない。

これまで文化財指定というのは、同種の伝承がたくさんある場合、その中でも歴史が古いものや原型と考えられるものを指定する傾向にあった。けれども、このようにたくさんあるものでは、それが難しい。その結果、点ではなく面で指定するという動きも近年始まってきた。たくさんあるものを、まとめて捉えようという把握方法である。このことは、ユネスコの無形文化遺産の考え方にも共通している。

ユネスコの無形文化遺産というのは、2018 年に「来訪神：仮面・仮装の神々」が代表一覧表への記載を決めており、過去にも「山・鉾・屋台」や「和食」が記載されたことでも話題となった。よく「世界遺産」とも混同されるのであるが、実は両者はまったく異なる制度だ。世界遺産は、対象が有形であって、しかも人類的な絶対的価値が必要とされる。しかし無形文化遺産のほうは、それを大事に継承していることが重要なのであって、世界遺産のような絶対価値は問われない。むしろ、歴史的に正統だとか原型だから価値がある、ということを言ってはいけないのである。

日本における民俗芸能の保護も、むしろ、そうした方向に転換していく時期にきているという気がしている。歴史的な価値や原型のもつ価値は、これまでの文化財の中で数多く評価が為されてきた。しかし、数が多い芸能などは、それがゆえに後回しにせざるを得なかった。香川や富山の獅子舞などはまさにその典型といえる。

一つの芸能についてじっくり調査・研究をおこなうことは必要なのだが、その調査・研究の間に、他のいくつもの芸能が休止・廃絶に追い込まれていく現状を考えれば、たくさんあるものを総合的に把握することは重要だ。さらにそこから、伝承者同士のネットワークに発展すればもっとよい。いま TARO に期待したいことは、これまで述べてきたような「面」での把握から、ネットワーク構築に至る動きへのサポートである。一つ一つの団体ではできないことも、まとまったらできることがある。そして仲間がいれば、共通の問題を一緒に悩み解決していくこともできるはずである。そういう流れを、京都から全国的に発信するということには大きな意義があると考えている。

伝統芸能の現在

広瀬依子 (追手門学院大学 国際教養学部 講師)

一昨年まで、伝統芸能から現代まで、関西の芸能を紹介する雑誌をつくる会社で勤務してきた。さまざまな人びと、いろいろな舞台を取材させていただき、演者に加えて技術職や制作の方々にもお話を伺った。その際、伝統芸能に関わる多くの皆さんがおっしゃっていた課題が後継者育成である。何事によらず、つないでいく人がいなければ継続は難しい。27 年間の勤務期間を通じて、それは変わることはなかった。

昨年から〈伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議〉〈伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム〉に携わる機会を得て、この課題は今も続いていることを実感した。特に、同プログラムは名称に〈復元〉と付いていることからもわかるように、後継者を得られず途絶えてしまった芸能を取り戻す内容も対象となっている。2018 年度は 20 件の申請のうち、2 件が伝統芸能の復活であった。民俗芸能の復活も 3 件あり、合わせると復活を目的としているものは 5 件ということになる。また、断絶の危機を感じ、手立てを講じたいという内容も複数みられた。

伝統芸能各分野の関係者ももちろん状況打開に心を砕き、この課題への取り組みをずっと行ってきた。後継者を得るにはまず普及である。このような伝統芸能があるということを知ってもらわなければ、その道を目指す人や鑑賞者も生まれない。一般向けの講座やワークショップも各分野で開かれている。学校への出張公演や体験授業なども、折に触れて行われている。

しかし日常生活で親しんでいる音楽はポップスやロックであり、学校の授業で行われる踊りはダンスといった状況の今、伝統音楽や日本舞踊に触れ続けることはなかなか難しい。たとえて言えば、玄関の扉を開けるきっかけはあるが、家に上がって滞在してもらうことが大変なのである。今後は入口の先を見据えた展開が必要となるだろう。この世界に携わる人と鑑賞者、双方を生み育てる方策が求められる。

また、記録も重要だ。昨秋、日本演出者協会関西ブロック編集の『関西戦後演劇史』が刊行された。それまで断片的だった記録がひとつにまとまったことで、現在の演劇人たちは過去に学びやすくなる。新劇ではあるが、これもひとつの継承である。記録は地道な作業だ。だが、もし何かが途絶えてしまったとしても、記録があれば復活の手がかりとなる。

とはいえ、情報収集や発信、企画、事務作業が不得手という演者や裏方も一定数いる。創造者と普及者といった、人と人とをつなぐことも必要であろう。ネットワーク作りである。TARO には記録とともに、この役割も期待したい。

上記の会議やプログラムが設置されたということは、伝統芸能への後押しが必要という判断がなされているということである。現状に危機感を抱いている関係者も多いはずだ。しかし、逆に言えば危機感があるからこそ、今までにない新しい発想が湧いてくる。それは新たな創造も生み出す可能性がある。そう考えてみれば、まだまだいろいろなことができそうだ。

4. 伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議委員より

伝統芸能文化の活性化に必要だと思うこと –

吉田純子 (文化庁 文化財第一課 文化財調査官)

TARO が活性化に取り組んでいる伝統芸能文化とは、国が文化財保護法に基づき保存と活用を図っている無形文化財の芸能分野（以後、伝統芸能）、無形の民俗文化財の民俗芸能さらに芸能関係の文化財保存技術（芸能に不可欠な楽器や衣裳、用具等を製作、修理する技術）にほぼ合致している。

芸能は、演者・観客・環境の三者が揃ってはじめて確実で安定した継承が確保される。ここでいう環境は、演じる場である舞台施設や、演じるに不可欠な楽器や衣裳等の物質的側面と、その芸能の意義を認めて支援し応援しようという意識、すなわち非物質的側面を含めたものである。民俗芸能は地域の人々が地域の民俗行事として伝承し、披露するという性格を持つので、伝統芸能でいう観客、つまり対価を払って芸能を観る人々は必須ではないが、伝承地域あるいは伝承地域を含むより広範囲の人々の理解と支援が必要である。文化財保存技術は、環境のうち物質的側面を支えるワザである。

文化庁の支援は、これまで主として演者の育成と物質的側面の環境整備に対して行われてきた。文化財指定と指定文化財に対するこれら保護措置が図られたことで、息を吹き返した芸能も多い。地道な支援を倦まず弛まず継続することが、文化財の保護にはどれほど大事なことであるか今一度認識すべきだろうと思う。

しかしその一方で、芸能継承の難しさは、多くの分野で年々増すばかりである。伝統芸能諸分野では、落語などの例外はあるものの、日本の総人口の減少率以上の割合で、演者、観客ともに減少している。これにより楽器や衣裳等の製作修理技術者も、さらには楽器部材などの原材料生産者も、という具合に連鎖して需要が著しく落ち込んでいる。民俗芸能については少子高齢化、芸能の主たる担い手たる若者世代の不足という状況から、いまや限界集落や消滅集落など人口流出等による地域自体の消滅ということすらおこり、民俗芸能の継承を考えることは、地域の存続を考えることに等しいという状況に至る場合もある。このような状況を鑑みると、従来の支援に加え、別視点からの新たな支援策を検討する必要を感ぜざるを得ない。

伝統芸能文化の活性化に今後、必要だと思うことを二つ述べておきたい。一つは低年齢層を対象に、芸能に「触れる機会」を充実させることである。義務教育段階での伝統芸能・地域の文化（民俗芸能）教育と、学校教育外での地域の文化体験の機会の充実である。幼少期に体験した音楽や所作は、大人になって、その体験から離れてしまっても感覚の中に記憶として刻まれる。数十年ほど中断した民俗芸能が、10 歳頃まで当該芸能の舞を舞っていた方の記憶によって復活できたとの話をうかがったこともある。伝統芸能の場合、体験者の中から実演家を目指す子も出てくるだろうし、ならなくとも見巧者、聞き巧者として良質な観客となり、ひいては実演家の技芸の質を高める存在になることだろう。民俗芸能の場合は、成人して他所へ転出する人も多いと思うが、いずれ故郷に戻り、伝承者の一人になる可能性も、また他所に居ながら故郷の芸能を応援する存在になる可能性も生まれるだろう。

二つ目は、関係者によるネットワークの構築である。特に民俗芸能、保存技術に対してその必要を思う。民俗芸能は特定地域を前提とし、保存技術は関係技術者の少なさから、ともに独立傾向が強い。横に繋がることで、それぞれの問題や解決に向けた取組を知り、共通課題について多角的に検討し、対処する知恵も出てこよう。また広範なネットワーク構築は、多くの人々の関心を得ることにもつながり、よって理解者・支援者の確保にも効果があると考えられる。民俗芸能では同種の芸能を伝承する保存会による全国的ネットワークが結成されつつあるが、残念ながら、現在このような取組に対する支援の仕組みが出来ていない。

今後、別視点からの支援策は幅広く検討されるべきであるが、いずれにしても従来の支援策に加え、観客や非物質的側面の環境整備、より多くの人々、あるいは社会全体で伝統芸能文化を支えることを実現するための支援へと、その幅を広げる必要を感じている。